

第一回俳句賞「25」大賞

むし・けもの

神奈川県立横浜翠嵐高等学校

名を知ればすぐそこにおり鉦叩
爪先を上げて団栗踏んでいる
抽斗の団栗知らぬ穴のあり
図書館を出られなくなる秋の蝶
昼休みかんの筋を取れば終わる
露霜をつつと小指でたどりつつ
父帰る音にまぎれて茶立虫
木枯や駅への道が軽くなる
マフラーの色が感染女学校
初冬や胸がふくらむほどに息
学ランを通り抜けていく寒風
スコップを掘り起こすため雪を掻く
冷凍庫元雪うさぎ眠りいる
間道の兎のシチュー専門店
着ぶくれにこんなじゃないと怒る君
空っ風避けられなかった目の痛み
口笛がかすれて消える冬の夜
ゆったりと枯葉の旅や名なき川
冬木立一人櫂に寄りかかる
深山に陽を見上げている狐あらん
地に伏して重いまばたき冬の鹿
ハリネズミのための毛布を買いにゆく
靴履けばひりりと寒し笹子鳴く
防犯用カメラぴかりとして狸
かけうどん（中）を並んで食う寒夜